中日新聞（14 頁）岐阜県版　2023 年(令和 5 年)10 月 25 日(水)掲載

ドングリ凶作予測 今秋は大量出没か

ツキノワグマ 人身被害すでに5件

秋になるとえさを求め、人里周辺に出没するツキノワグマ。県内では今年、クマのえさとなるブナやミズナラなどドングリ類がほぼ結実しない「凶作」が予測されている。出没件数や人がけがをする被害も例年より多いペースで発生しており、県は「えさを求めて移動するクマに遭わないよう対策を」と注意を呼びかける。（都沙羅）

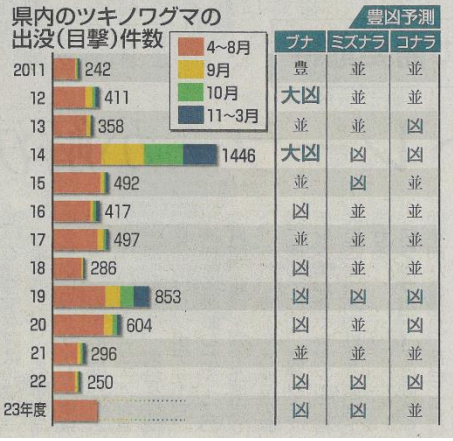
山林に現れたツキノワグマ＝2021年6月26日、飛騨市で（県提供）

県内のクマによる人身被害は昨年度が1件、一昨年度は2件。本年度はすでに5件が発生。22日には、飛騨市の神岡小学校近くで市内の80代の男性がクマにかまれるなどして大けがを負った。出没（目撃）件数も、22日時点で517件。昨年度が1年間で250件で、すでに倍増している。

その年にクマが出没しやすいかどうかは、えさとなる堅果（ドングリ）類の量が大きく影響するようだ。凶作の年には山や森林内のえさが減り、クマは人里に下りてくる。

県は8月28日から9月8日にかけ、県内の26地点で260の標本木を調査。枝の実なりなどを目視で調べ、1本ずつ数値化して判定した。その結果、今年はブナとミズナラが凶作、コナラが並作を予想した。全て凶作が予想されながら出没数が少なかった昨年度の事例もあり一概には判断できないが、クマの「大量出没年」とされた2014年はブナが大凶作、19年は3種類とも凶作の予想だった。

県内では今年、6月から7月にかけて多く目撃された。県環境生活政策課の担当者は「凶作が予想される年は、秋の出没件数が増える傾向にある」と懸念する。山林や農地に近づく際は、音の出る物を携行する▽えさとなるカキやクリなどは残さず収穫する▽クマの隠れ家や通り道になるやぶは刈り取る▽目撃したら近づかずそっと立ち去る―などの注意事項を呼びかけている。



豊凶予測	ブナ	ミズナラ	コナラ
2011	豊	並	並
12	大凶	並	並
13	並	並	凶
14	大凶	凶	凶
15	並	凶	並
16	凶	並	並
17	並	並	並
18	凶	並	並
19	凶	凶	凶
20	凶	並	凶
21	並	並	並
22	凶	凶	凶
23年度	凶	凶	並

5~7年周期で「成り年」

ブナはクマのえさとなる堅果（ドングリ）をおよそ5~7年の周期で豊かに実らせ、その年は「成り年」と呼ばれる。理由としてはさまざまな仮説があるが、広く支持されているのが、実を食べる「捕食者」から身を守るための策との説だ。

ブナを好んで食べるのは、ハエやチョウなどの昆虫やネズミ。県森林研究所（美濃市）の担当者は、「凶作を数年間にわたり続けることで、その間に捕食者の数を減らすことができる。すると次の豊作年でたくさん実を食べられたとしても、食べきれないほど残る」と解説する。

気候も影響する。実の成り具合は、その年の花がどれだけ咲いて結実するかによる。春先の気温が低いと花がうまく生育せず凶作になることもあるという。

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期間：令和 6 年 11 月 2 日
この記事は中日新聞社の許可を得て使用しています。